■知的障害のある子どもたちへの実践事例

マルチメディアDAISY図書との出会い
――広がる語彙とコミュニケーション

奈良県香芝市立真美ヶ丘東小学校
西浦 富美子

はじめに

本校の特別支援学級でマルチメディアDAISY図書を使い始めて１年余りになります。まだ活用法を模索している段階ですが、使用範囲は、個別学習から一斉授業へ、また学校図書館へと広がりました。ここでは、その３つの場面での「わいわい文庫」活用の様子を報告します。

個別学習（国語）での活用

言語理解力は低いが、視覚情報を用いると理解や思考がしやすくなる２名の子ども（５年生）への取り組みです。

高学年になったＡ君とＢ君に、実践的な国語力をつけて自信をもたせたいと考えました。劇発表や園児との交流（絵本の読み聞かせ）を目標にして、発音練習や音読練習を進めていました。２学期に寄贈された「わいわい文庫」は、そんな彼らにとってうってつけの教材でした。

文章がハイライトと音声で面白く読めることを確認した後は、各自パソコンにCDを入れて好きな話を聞き、つぎに消音して音読練習し、最後に教師に読み聞かせるという手順で活用しました。その結果、

①文章の区切りで間を取る。
②口を大きく開けて読む。
③意味を考えながら読む。

という課題を意識して読めるようになりました。昔話や『11ぴきのねこ』シリーズがお気に入りでした。『そらまめくんとながいながいまめ』では、気持ちのこもった音読をして担任を驚かせました。今まで彼らが言葉にすることのなかった強い競争心や嫉妬心が、また素直な同情心が読み声に溢れていました。

３学期には幼稚園を訪問して、就学前の園児たちに落ち着いて絵本を読み聞かせることができました。この取り組みを通して、Ａ君は自分の気持ちに沿う絵本を選ぶ力を身につけました。Ｂ君は校内放送をしてもっと多くの人に話しかけたいという意欲をもち、６年生になって実現させました。

一斉授業での活用

知的障害や情緒障害のある子どもたち７名（１年生・４名、２年生・１名、４年生・１名、６年生１名）への取り組みです。日常生活に必要な言語力や手先の巧緻性を養う授業を週に３時間、教員４名で担当しています。

そのうちの１時間に「わいわい文庫」の視聴を取り入れることにしました。以前から給食の献立を話題にして、自分の好きなメニューとそのわけを紹介し合ってきましたが、「わいわい文庫」を投入することで話題を広げようと考えました。

『やさいだいすき』『パパンがパン』『どうぶつのおかあさん』『コッケモーモー！』『くださいな』などを使って、食物や動物、買物などについてコミュニケーションを図りました。その中で一番成果が上がったのが『ことことことこと』です。肌寒い季節になるまで待ち、２回に分けて学習しました。

〈１回目〉

まず、「ことこと」がどんな音かを確認してから、基本的なおでん種の名前と絵カードのマッチング（だし昆布は実物）を行いました。だし昆布を家で見たことがあるいうことで、みんな乗り気になりました。

それから、本作品を視聴して、言葉の繰り返しやリズムを楽しんだ後、一人ずつ好みのおでん種を紹介し合いました。卵にもビタミンが含まれているという情報を聞き取って自己紹介に取り入れたのは、さすがに５年生でした。「めしあがれ」という言葉を覚えた１年生は、おままごとで早速使っていました。

写真１

〈２回目〉

映像をよく見て、前回の絵カード以外のおでん種の名前を見つけ出すように指示してから視聴しました。

「はんぺん」はあまり食卓にはのぼらないようで誰も知りませんでしたが、「つみれ」は家庭で食べた経験を思い出した子どもの一言で、みんなの記憶に残りました。その子どもは構音障害のため対話活動に消極的でしたが、自信を得たようです。みんなも触発されて、つぎのリズム遊びでは、手拍子を打ちながら「××つみれ」「××薩摩揚」というように新しく覚えた言葉を飛び交わせていました。（××は手拍子）

「わいわい文庫blue」視聴コーナーの設置

通常学級に在籍する読むことに困難のある児童・生徒は、全国の小中学生約1012万人中約25万人（文部科学省2012年12月調査）で全体の2.5％に当たると推定されます。読書意欲の低い子どもたちを加えると、さらに多数に上るかもしれません。

彼らに対して学校図書館が行えるサポートとして、「聞く読書コーナー」を設置しました。

場所は、図書室の入口の締切にしたほうのドアの内側です。みんながすぐ気づく場所に専用パソコンを置き、集中できるようにヘッドホンをセットしました。校務員さんが壁のペンキを塗り替えブルーの３段ボックスを添えてくださったおかげで気分一新しました。

壁には「わいわい文庫」のポスターを３枚貼りました。『ホシオくん 天文台へゆく』を開いておくと、誰かがすぐに聞いていました。６年生は『国会シリーズ』に挑戦していました。

いろいろな興味をもつ子どもが寄れるように「わいわい文庫blue」のほかに、英語やダンスの本の附録CD・DVDも一緒に置いてみました。

その後、子どもたちはパソコンの操作に慣れ、『つるのよめさま』『わらしべちょうじゃ』などの昔話に親しんでいます。

写真２

おわりに
―「わいわい文庫」への期待

マルチメディアDAISY図書は、個別学習で、第二の先生となって子どもたちを導いてくれます。かつ、それを自分が選択し操作しているのだという有能感を子どもたち自身に与えてくれます。

本年度はタブレット導入により、DAISY図書の利用回数が増えました。

１年生から操作できて本当に手軽です。言葉の意味がよくわからなくても音声に従って復唱することを楽しんでいます。

一斉授業では、「わいわい文庫」を媒体にして考え、語彙を広げ、温かな

コミュニケーションを生み出すことができました。

今後も、主体的に読む態度が育つよう見守りたいと思います。

最後に「わいわい文庫」への要望を３つ述べます。

第一に、検索機能がほしいです。ジャンル別や五十音順、再生時間の長さ順の索引があると便利です。

第二に、「わいわい文庫blue」をタブレット内でもポスター上でも「わいわい文庫」から独立させていただけると、著作権の心配なく、安心して利用できます。

第三に、ラインアップについて、Ａ君のおすすめの『こぶたのマーチ』や『よくばりぎつねのじろろっぷ』のように少し悪戯な主人公が活躍する物語や、『ことこと　ことこと』のように日常生活・言語に根ざした作品が増えることを願っています。

以上、ICT化の大変遅れた学校ですが、できることから始めました。私たちのチャレンジに展望を与えてくださった本冊子執筆者の皆様方をはじめ、読書バリアフリー研究会や学校見学会などでご教示くださった鳥取大学附属特別支援学校、京都府立南山城支援学校の先生方に御礼を申し上げます。